



増補忍名所圖會卷之三

増補忍名所圖會卷之三

洞李 香齋著

岩崎 長容増補

城東之方

○八幡宮

八幡町あり

神主

松岡若狹

増田中の八幡といふお社赤土社殿なりといふ（お田の中より）

文政一を成田下院寺補修し市城下の鎮守といふなり城守ハ

幡といふ後今の如く町割なりといふ八幡町といふ此所より功進のもの多く

住し居りや大工町ともいふ少き裏町城守町といふ

○龜通山行由院大長寺

京都百萬返末下町通りにあり

本尊阿彌陀佛

座像三尺計
作ふなり

多門天堂門の向あり額多香閣象

書南樓蘭其寧書 鐘堂の北あり

大佛 唐銅釈迦佛座像長八尺計 沙門信阿和尚奉納
連坐亘六尺高サ二尺余

古碑 門の北あり 曆應三年より同年まで五百年二三四の古多し

増 小沼堂 大長寺末長野に池門外あり小菴あり

増 芭蕉翁句碑

古池や蛙跳込む水の音 七世

唐銅地藏佛 座像六尺計

増 亀甲松の跡 町屋の裏あり松枯る所謂又云は

長野村 町家あり櫓の馬場といふ東の石は江戸馬場移り

昭々

馬場 三丁程土の上は波岩櫻如櫓ありて花の以て殊小なり

應珠山擁護院長久寺 新義真言山持国寺治部報恩院末

馬場の中程ありと領三十石御朱印本尊觀世音 座像三尺計
作五尺

不動堂 本堂の右あり

當寺は文明年中成田下総守顯忠草創しを代に新修なり

開山は傳之也文明年中寂を

久伊豆大権地 長久寺の北あり

増 我空堂 小菴あり村の中程ありあり藤原公家御書

増 縁起曰作此堂師公家佛土のきこめるより作画工の画はるあり

河の大權聖者の加持力ありて凡夫の眼も見えぬなり
延暦年中鏡の影のうつりぬ谷に虎の音ありと昔弘

法大師より此城に加持し本城植むて家々御書あり

またとて頼むるものハ必利益城蒙。何と云ふ。一、是にハ
此方より定めうやき。一、中何事と云う。本に何の事とも傳は
し。この頃大機有て根より水湧せしめ。一、諸病愈なり。是は
是の時より明かになつた。母方師より。一、數年後の後。一、少也大師の植
む。一、証。植はて幾年も替りたるある。一、元禄祐の頃。一、松の植
株少。一、壊して有。一、それ朽なして何。一、膠と埴城結く。一、且に
る。一、初年。一、元禄四年。一、その古像とある。一、且。一、奉め。一、是元の枯株の証
なり。一、昔の。一、人。一、而。一、其。一、造。一、當。一、せ。一、と。一、あり。一、の。一、一。一、ふ。一、生。一、夜。一、の。一、夢。一、み。一、重。一、塔。一、造。
當。一、み。一、と。一、云。一、と。一、御。一、告。一、け。一、り。一、と。一、云。一、り。一、昔。一、の。一、如。一、く。一、其。一、故。一、一。一、重。一、と。一、あり。一、と。一、云。一、御
告。一、め。一、の。一、一。一、重。一、に。一、き。一、る。一、事。一、也。一、一。一、か。一、た。一、り。一、其。一、利。一、益。一、の。一、一。一、是。一、も。一、如。一、來。一、の。一、一。一、あり。一、
ら。一、ひ。一、り。一、し。一、れ。一、又。一、の。一、目。一、火。一、見。一、え。一、さ。一、せ。一、給。一、え。一、と。一、云。一、ふ。一、と。一、常。一、に。一、不。一、変。一、に。一、な。一、り。

此事の如く不知なり。正徳六年二月、此地に住する僧、
 親しく友人あり。夜、不薬し。に之、夜二人の者、發熱狂亂して、
 云、我、此地、尸、埋、す。某、師、如、來、滅、識、なる、其、罪、重、く、苦、惱、也。
 又、之、也、と、云、る、候、に、忽、地、中、に、忽、中、復、き、夜、不、薬、師、如、來、
 其、後、平、大、師、の、師、公、某、疑、ふ、者、に、明、う、り、と、れ、毎、是、より、所、入、の、任、任、
 流、増、り、ぬ、此、地、に、つ、ま、の、時、に、云、く、流、初、は、毒、の、時、に、云、く、毎、夜、深、更、に、
 何、く、す、強、毒、音、何、く、何、者、の、任、業、も、云、れ、お、は、る、云、く、何、と、
 云、く、是、より、云、く、信、お、り、云、く、の、毒、を、信、う、は、此、邊、の、田、圃、に、お、り、
 云、く、毒、の、跡、に、云、く、地、の、名、に、云、く、云、く、の、某、師、と、稱、し、なる、者、に、
 世、に、蝮、毒、師、毒、某、師、に、お、り、思、ひ、云、く、云、く、と、い、ぬ、何、なる、謂、や、ん、と、云、人、
 何、く、地、名、ある、跡、に、云、く、斯、に、云、く、云、く、し、某、の、毒、日、に、なる、者、に、利、益、と、

得る事 大権聖者の開基あたりの 霊地なりと仰りたのり
武大師の加持力詠花の曉の夢をみて 夢を覚て凡そあり
信を以て

○増 茶水の井

茶師の側より 是地汲湯とありて 浴にこれ
病の癒やう 享保の頃より遠境より 尋常 離れし一村の賑ひ
いそぐ 或は娯戯む久 遊宴の地なりとありて 詠を
程ふ里人の水汲汲とありて 浴室設け利便なりとめ事なり
一卿の筆端より 遠く領主より 浴湯遊宴の事 停止せしめ
は 依て茶師の地をいふ 元の農家とありぬに 次第ふあり
も 少くはぬされとも 法水の利益を得る事 今も 猶うとて 来り
浴をふ 浴病愈きといふ 此水の妙なる事 只今の湯桶に

數十人浴をとりとも 濁る事なり 實に茶師如來の靈驗著し
事伝をう 仰く

○白山妙理大権現

同村の東傍より 当村の鎮より 茶師如來
小菴 若小玉村の程より 阿彌平等寺の所なり

○岩窟地尊

同村の中程西傍より 多山の麓にあり 入口堅く天
横に大扉あり 四方切石より 四法に天四而いれれも みるに石を
置たり 内小石地尊を安置し 小見障あり 有るもの 皆似たる物なり

○湊間山

○増 同村田圃の中より 往還より 石をいふ 凡そ間
計廻り 丁半山あり 岩窟あり 看るに 多量むを 形小足障あり
何の物と又あり 寺の八幡堂と 石碑小鑑あり 数あり 岩窟のハ
備といふ 石の傍より 大なる 二層斗小なる 七八尺 神を祀り

○愛宕山

宮祠あり

○増 清間山より並ぶる山なり。山に

○増 葦山

同村の入口右半民家の裏より葦竹有る名は古碑二基敷の中より元久元年甲子年とあり今年迄有る三十二年一基は文永三年とあり同百七十四年一基は子の標あるものなりと大方減碑して見えり

○葦竹

民家の裏よりむろ一弘法大師當國が通る所と云ふ典へと云ふ者の家より葦竹は能く望みたりと云ふは此者極く貧乏なる者ありやあるは我山の竹は悉くあるひて杖にたりと云ふ是よりふ思ふや葦竹は皆葦なりといふは此者こふ方幾く細くありぬれぬのつらう竹も生るゝと大師又と同おきなり

と云ふ者の方よりむろ一弘法大師當國が通る所と云ふ典へと云ふ者の家より葦竹は能く望みたりと云ふは此者極く貧乏なる者ありやあるは我山の竹は悉くあるひて杖にたりと云ふ是よりふ思ふや葦竹は皆葦なりといふは此者こふ方幾く細くありぬれぬのつらう竹も生るゝと大師又と同おきなり

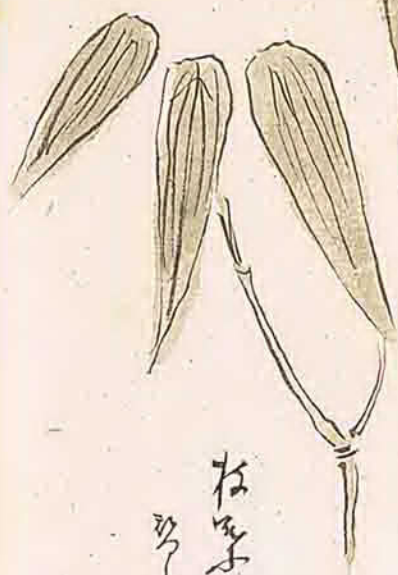
○志那比竹

をまぐさの竹子かきとて可

七の月のはや切て乾く



や一箇厚房を二箇七の月にはや切て乾く



おまきとて可

増小針沼

小針村の南西小川より東西經云丁斗南斗斗斗
系川其外都下小川に多落溜り四時水波流たり東へ流るの
川小流る

○慈雲山貞觀寺

長久寺末一老し小見村の入口往還のふ有

寺領十石市朱平觀世音堂本堂の西あり佛像暖釈迦也

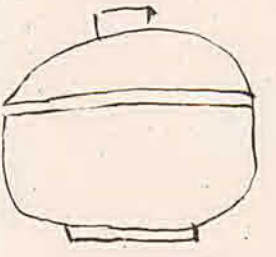
山門の内右より左へ唐銅佛阿弥陀堂同左より山門外堂則力士
二王所出也

岩窟あり其の後には觀音堂の腹より入る方八尺四面悉く書文板

石より墨むま中へ入り望み大橋より北の方八尺四面形あり石

よりなる石地なり其の

岩窟より出
古器臨圖



圖の如し
唐銅のて
作る

増縁起曰夫当山ハ古賢船師乃梵刹觀音薩埵の靈應の灵切し

曩時豐御食炊屋姫の天皇推古乃馭宇小當り根改と宮太子の

金余少應りく大仁勅作鳥居東國の海道修飾良田を膏腴

の地に開き水汲み治免險隘を平填らる事あり此地小あり不測の

靈地也感一自手觀音施無畏の像彫刻伽藍を結構し

是地島豆を盛盛あり一時堂坊規制嚴謹なり其小堂双

の壯觀なり一と名無き小興廢起伏の時小係つて本堂漸く形

のく矮なりと云ふとも柱傾き曲毛ありて而露小朽荒蕪

の地し畠人といふ愛ふ人五十八代順徳院御宇建保年中瀧

憲阿闍と云ふ人々も靈場の頼廢し廢跡ありて是地再興し

且夕本堂の瑜迦修飾他疏と東西小唱歩ある事凡二十四回

漸旧觀不復一歟后龍憲阿南利仁治云壬寅年八月順世其則
是於南山中興の開祖といふなり已其三百餘歳の星霜を経て密
弘通の地とせり又元龜年中足利家の為魯薄の災小延て池魚
旱ふかの時寺舎僅坊一宇も残るを鳥有とせり云々毎世
昔施無畏の尊像、灰燼を辟て老松の枝より生じ城程にて
是を辨じ得たり是れ少一の堂舎成堂てあり是れ天正十
八年石田の黨の兵火より焼けて大に荒廢なり此れ觀音の堂小古の
形も失ひ、寛慶九年十月觀音の由來

東照神君の 台聴小堂一寺鎮石の御朱印并境内竹木乱防
の御刺れ給ひぬ爰に山へ色増増 昔よりある爰に境の昔
より丘壇より寛政の頃迄ありてお階御築へとあり小土中より

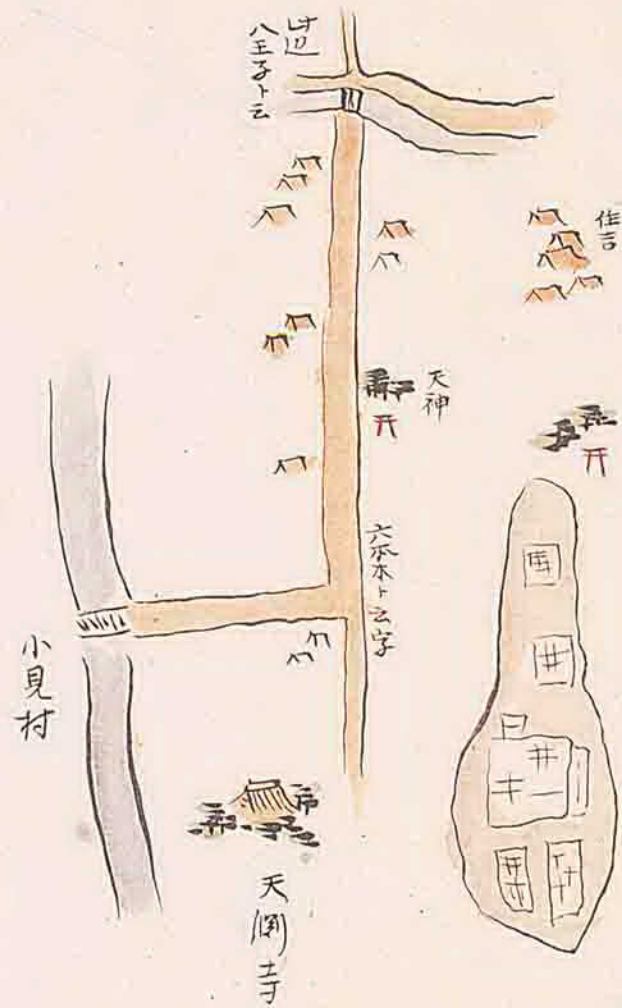
の石龍の堀江なり 大に八人を入容へ一其形石狀畧に櫃の如し
僅古何の爲に作りし事跡なきを傳傳之又碑の傳はれなく故
内小石地盤城あり一窟の地を云り其不思議の古壇なり

増法華坊 觀音の西四五十歩小なり民家あり處に小谷
蓮華寺の旧地し三十番神の石祠小なる所なり元龜年中々
の地小樹あり寺地小なり

○荒木天神 荒木村の中程あり小なり村の山を神といふ例も夕暮日
なりさうな祭儀をもち振舞ひはる業なり 此善治 同町の東に
有り荒木四郎右善北条家の居る万石を領し是所城の跡なり所より
小土より上橋上の面影あり沿の川小なる所あり 里人其地を神といふ
増今も古沼あり其の地鏡丸なりい鑑の鏡物なり此地を事なりなり

里人の云四郎右善成田の氏族なりと思ふ所なり
 變小松上城を築き居住せしと云根小成田家没落の後兵小
 没せし者なりと云根考ふ所なり成田記に荒木城ありと云即ち苗
 の人又云の城の没落なりといふの如く天正の龜城上國が市田より
 如く要害城なりと云根入りて天文中成田赤井の黨と合戦の時
 六の月より陳延の如く同書に國が城のよりなりと云荒木城の如く
 なる一經東國記戦記にも未見之なりといふ城ありとの兵器蓋我
 い一時の物なり且時軍器成田記に上野國吉柳の城に赤井山
 城を勝元は近き時ひ強大なり同記板倉飯の北大島を合戦なり
 是れ赤井の城を幕下と云根板倉集めて近國を押領天文五年
 八月上旬の境利根川に押領し住吉の赤井陣を居忍城を攻めんとし

中務少輔右善城よりき里餘押出荒木川にあり小當に橋あり
 落し小當の堤を橋と云根備を去て有るなり折角一霖雨あり
 敵川を渡りし給ふ有るなり所小云云下界



○聖徳山天満寺 旧村の南より洞家清善寺末
 大子堂 門内向少あり大子立像十六歳之時同延内陣横領聖徳太子の四

沿のうちより龍燈城をくぐりお霊驗ありける事いふ可
是より月より四郎信教の思ひを祈り則ち奇を用基と根津
四天王の靈地を摸し山を聖徳山と号し寺は天海寺と名く四
に四天王住吉八王子等の社を觀請し中央に御堂并山門四郎
神の御建立し早夫より以来東宮太子と崇めたる天正年小
崎より荒木也善小至り遠境小窓る今日龍燈城名付て也善
沿と云嶋城太子嶋をいふ今小嶺と沿の由より龍燈出現し彼宮
より至る所外其驗ありたる事今同しと云ふも星霜稍移り
諸君悉く風破りも小隅き既に衰廢し及小至りも寛文十一
年卯年忍の城主河原豊後守御原の御位に秋廣寺像而高の慈
光除きしなり者也

○新御田

○増 伯内五丁日光街道の駅より川俣市園部三丁館林二里行田
二里行茶肆旅店商家農家軒並並東西未討りて巷はけけ

○與木大明神

石の中程東側小河

むろし清水より幣小神より書付杉の木二本流れ流る此處より依り
是城あり何の神ありと云ふに於て未とけぬ

○増 概多小鏡より寄木あり河内より引りて考ふ備わ江は砂子田
寄木大明神河海あり河内源義家御片負任宗任御征伐の為島國
下向の時此所より島にあり寄木の社を拜せんとておの事曆法
尋ねたまひし漁夫曰當社日女を尊橋姫と祭る云なり橋姫に
海中より身を授けたまひし時其母碎て死し小宮の此所より流れ

家の人は是れ因て身家の思ひ方と見ゆやまぢあらうし哉
 顔ひぬ是れ今も孝感の致し處にて此危難を遁れし物と
 して減らふ僕が實に其鱈の甲成ふとけしむに主家小當免
 一ツに僕の家よりて孝感の証とありと也

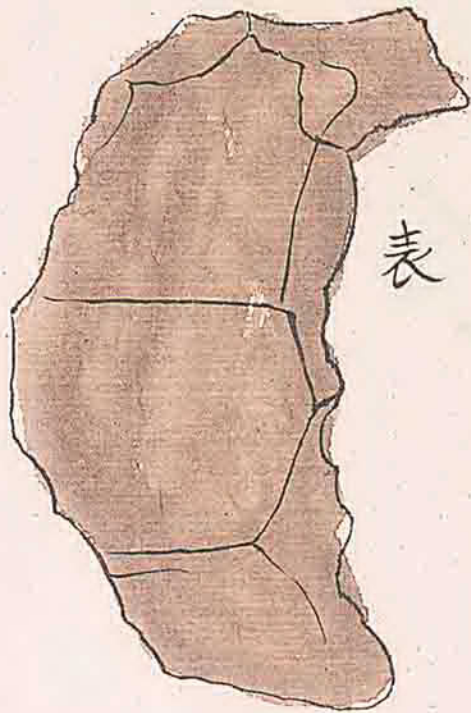
附てつふ先より書中僕役中川鉄砲と此難を免ひし
 証書一ツは因に之と書けり此の書を見れば人々

たまに

○川俣山岡所

増別所のお利根川堤の上より廿八鉄砲等証改り半箱根荒井の
 六ツ

大鱈之甲



表



裏

三尺ハ寸

増補忌名所圖会卷之四

洞李 香齋 著

岩崎 長谷増補

城西之方

久伊豆明神

大宮口御門の外より別當寺より山峯雲寺

脩強なり当社の花表往古に今の沼尻に在るの東に一社ありしや

そは 神君御八四の節めりて人等小亀昇り居たりしと云

て古瑞照つくと申感悦まされしと云や是より寺に亀行山と称

はとのや

増大宮口御門とあり此久伊豆の寺の名ありて荒井田町の山神と云

慶祐橋

持田組屋敷の裏大宮口より持田村行側の川に

○係る搦鉢つふ一徳丈門下慶祐退轉の跡おれ名ありと抄聞之
大雄山正覺寺

持田村往還のたにあり浄土宗鴻巣
勝願寺より属し智恩院あり寺領三十石御朱印あり阿部氏世々の位
牌所あり古碑門内に百文永の年号あり當城は中丸の地あり出と云

元
文永十一年戊戌月八日

○増寺傳曰往古真言の梵刹あり久敷荒廢小及び城成田氏也
開基は鎌倉光明寺世一世智教上人招て長く安ん居りむ是
當寺の中興開祖と云後松山下野守忠吉侯著提所と傳ふ
梅貞大童子殿墓碑寺内ふあり
忠吉侯
嫡男

○持田山阿弥陀寺 正覺寺より一丁半あり時宗御憐

清淨光寺未明り開基二世持田上人なり

○増諏訪明神 阿弥陀寺の裏より一丁半あり此地の諏訪古寺なり
ゆきゆき今神社に祭れる物なり

○増釼明神 往還の右にあり祭神素盞鳴尊

○増常樂山長禪寺 釼明神の隣あり新義真言同色寶

藏寺あり當寺は法印祐慶阿闍梨と云聖の御基ありゆに
墓碑あり寛平の年号刻あり

法印祐慶當寺開基
寛平三年歲
三月二十一日

増 寶壽山也藏院宮持寺

同往還の石あり新義真言

小牟村成身院未なり金治二年延應二年程決いの古碑中塔あり

増 星川の末

熊谷(新通)北川新谷子に少し悲の雨れし

川原石魚お及び熊谷の石と寺庭中にある魚の池より湧き出る

星川星川の池といふなり此川急初夏の頃より當多しと夜

景殊より一々よりこれぞ熊谷持寺とあつてひつり此

千町田の早苗は波打ちちやうとわめひきき人の袖に傳家の

あつと散れ来るあつと光いも涼しく見ゆる哉うちもけつ

安女より将おちやふのささくさくさく

増 常慶院

持田村四尾村にけだの石より河家成龍

淵寺未なり寺傳日成田親泰の師あり龍淵寺四世以成初老と受

戒より厄と有り新々念仏三昧の外他事無し程以列を招て尾

小所より一々なり新々念仏三昧の外他事無し程以列を招て尾

東より永正十三年屋丘卒といひ一寺新建なりうく大田山常

慶院より開山則養仙和尚あり屋丘の墓碑印塔にあり

永正十三年天
常慶院殿三定正公尼大姉
五月廿六日

増 深田

常慶院より東の方四尾口市門外四尾村辺の田舎にあり

天正の後小野村伊豫守此邑に備四尾には押寄といふも左右深田

ありて深田自由なるに城の中少勢に教へしおちされしと有り今程

田圃の土中より古物鉄物等散れぬあり

増 檜上城跡

四尾村より云のこ島地こつた外延と
し地の方より本と云のこ島地なること

増 永井領の石標

村の入口の巷より

是より北長井領

あるふおきりい永井の店といふ後人誤てかくあるなり

○ 与昌菴

村の入口より廿地延池上といふや茶師堂あり
堂より俗名の茶師を媛茶師といふ成田氏長息の達也と婦人の諸
形別して願ひといふ諸願の為なりぬのきけい此は茶師の
ぬきたる物堂内より元きり近年何故かの藩中加藤素なる者の娘
生じぬといふ言より父母の歎き大方此より廿茶師より祈誓しるに

日なりきりて眼明なりなりとて都てはりと限りて形なり云

○ 無量壽山泉藏院

新井真言下恩遍慈院末村の市程右

小河村

増 市といふ舎も敏りといふ今い脚小菴あり天正の政

兵野村伊豫守妻の御持なりといふ

○ 久伊豆明神雷電宮

おの西よりこれより省社文治四

年亥四月成田中郎成景遠よりきて至る古社社しと社家諸より
居り社より白梅多く初春殊に雲景し神主 青木主殿

○ 岩藏明神

池より村西寄り右にあり疫神し祭例三月十五日

神主 茂木丹後

増 成田御合より村といふ成田式部太郎助島田館の地は東光寺の邊

なりハ幡大神等御祭より度よりいふ山海の内村なる所

多小水張汲する所より忽感慈恵に及ぶ事なり

随神つ 馬居と本社 鐘堂 随神つ 馬居 石に下達社地へ合而向

別當伊豆山久見寺本社の右あり 新井直言一衆院の属に 雷電社

鎮二十石御朱印書せり 雷降の字に女出に雷蛭の者懐れ

多小水張汲する所より忽感慈恵に及ぶ事なり

○太平山龍満寺 村の北河より洞谷越あや草部慈恵

未寺鎮百石御朱印

増 かむ 僧坊悉く仰り寂冥なる矣抑と云

御宮 寺の東倚 權現水 山宮の側より 龍満 寺の西

六寸沼ともいふ此満は龍棲をり 下馬札 惣つにあ 山制札 下馬札の

禁制 龍満寺

一軍勢甲し人等並妨狼藉之事

一放火之事

一對地下人百姓非分の役あり事

右し條々を停止に記述犯者

速可原為科名也

天正十八年四月

御朱印

奇記曰抑當りの用是れ竜満と云ふ何國の竜と云ふは

又終る家七を以て時の人羅漢和尚と稱し成田の城主成田即と云

人或夜の夢小白き蓮花を見る怪して町あり城下のをとり

此寺に水あり有るなり 岩小城の築きあり阿保記に云

側の樹下二人の愛僧を小田子蓮が持つ。然るに、
けりや侍更に九僧よりを流し立歸り、
急き由り来る。永子廻り、
と招くと云ふ。毎般に集りて、
にてぬめを、
く、
満ち、
欣然とく、
けりや、
七多、
云ふ、

愛僧の道不意、
一、
彼や、
い、
笑、
地、
わ、
満寺と、
法、
八、
と、

漢の忽然として跡を時 一可成をいひしゆめ

天正八年四月申

東照神君近御御政體の行あらも為寄し入御時玉ひ信儒者
雪成 山家（長き）木をの雪に列るを西郷よりと為寄
より 俗座出御の修飾して位あるより位修飾し

神君山幼種より一山より時より一山に存知修さし、若れいとい相
難い上意修蒙り得る閑中（閑）の初太ふ山へ一より天下泰平
當家必ふのあわじと仰感懐より一則寄願百石の御朱印を
門を修像の山和れ亦くも而鬼滅止祀一にあらりなり 今昔
什宝より市制れ 又寺の東小井より
別て門あり 又寺の東小井より
神君山楊枝はよく市指揮より一城よりたあらりなり 今昔

権現水と喝其時七度より一地小宮祠を建て 神靈成常免
奉る音門前道より一山而向りし時佛の尊像を見よ
見下さるる憚りより一則今の如く曲りなり 山は是を山尊と
とふなり而思ひ成りなり 今の世も佛も五則法門寺と
明く清淨寂實なる靈地なりとぬ

寄寺什寶 金や團扇 陣鈴 三尺各あり竹篋

價百貫圓 印子香炉二 蜀紅袈裟衣 神君市膳具 唐盆五枚

○醫王山東光寺

村の西より 洞家龍洞寺未だ塔彫物あり

一尊像あり 木尊茶師也 寺一尺斗

（増）相傳ふ世茶師 田部六張太の依佛し 正安寺より 寺に牛馬穀類あり

按てをいひ

増 光明山一乗院無量壽寺 村の西倚田圃の方より新築

真言高野山金剛院属を多中寺なり

涅槃像掛物 横二間半 堂三間 彩色を以て
筆を以てし二作あり

寺傳云大同元年の草創し数家の田録に違ひ堂塔古くは不

傳にも又池を築きては不傳に却て秋庭とす

増 成田山恭藏院 村の中程右より 洞家龍淵寺未成田記田當り

一乗内通 equal 恭藏の(井)具し柳成田恭藏は七恭の三男と云ふなり

愛子ありて成業兄氏長恭親のより有しと云ふ成業は年家督の

駿動をせり父也恭は落髪して嫡子氏長(跡)成田一門家市

早重の族弟成親とす中より但父を成親に長恭の夫人とす恭

親成親より有るものなり 今家督のみ附此にありと云ふ

恐る切腹を叔父刑見助に已り家督とす 成田一門は重なり氏

七恭親新樹の無量壽より多中恭藏は村のより有る風は敬ふなり

く有る田邊成親より有るなり 同十年秋母の旭世を去りて後より

堂なりとす 成田一門は龍淵寺の先明菴親當國

駒西の壽昌寺に隠居し有るなり 成田一門は清和 是師

と 成田一門は成田の富小西方寺と云

時宗の一門なりと云 今佛像聖牌も亦寂しこれ石標塔の舊

蔚の力より有るなり 成田一門は成田の富小西方寺と云

兄の氏長より有るなり 成田一門は成田の富小西方寺と云

成田一門は成田の富小西方寺と云

成田一門は成田の富小西方寺と云

増成田落鴈

成田千畝接東西 鴈陣横斜落遠室春
去秋未留此地年 應飽稻果豐

日野前大納言資時卿

いづは〜成田の面影落る鴈のこの山の峯我城跡に

八景所謂

黒髪山晴嵐 筑波山夕照 利根川帰帆

熊谷晩鐘

長井夜雨 泉山秋月 成田落鴈 赤城暮雪

増宮田村

宮田太郎佐々里の旧跡の地なり 東鑑建久元年

云云 廿七番 宮田太郎云

其番廳南太郎藤九郎成田七郎云

増肥塚村

肥塚太郎光七旧蹟なり 肥塚代々熊谷の旗下のなり

熊谷家系小見五郎

古碑

肥塚某の旧地といふ所なり

石厚三寸斗 長三尺八寸

設我得佛十萬四生至信樂欲生
我國乃至十念若不生者不取正覺
康元丁巳三月

〓 応安八年三月七日 遵義禪門

横三尺二寸斗 長四尺五寸斗

熊谷宿

馬より西の方小寄る路程二里餘東へ四里丁深谷(三里云

十町熊谷以即直実の田跡なり

増廣

の市津を町の中程北側より 往還より 是れ世裏の田圃に延び

権現のありて直実の館跡といふ所なり 中江道の中にも頗る都會の

地ふくく南家新張年(四方の貨客上輻輳)販賣茶肆貨
食多し人群集る所あり家あり南家小多富山林の家
あり日々に柴薪取寄りてあり交易成りて武田馬場の神祠に中
程北側あり千枚神社に同儀に鎮座神々あり千枚座云
蓮多法師の墓碑に本社の外に側小寂然たり是より西石原の地
北の方の巷に妻泥の路あり二里餘に及ぶ宿内田所新築町
横町等の小石あり二七九日布致立

○熊谷山大慈院報恩寺 本町へりつ所北側あり洞多龍満ち
本山門樓へ本堂庫利相備りて中庭あり惣門横額に管律典阿
部正職公筆なり

○増寺傳曰往昔に淨土の梵刹ありて今に世に轉りて洞窟とあり

蓮生法師の本像に往昔尚寺小あり故なりて彼寺(堂)と云ふ

○高樹明神 町の中程北側より半日神尾例祭六月廿五日

神樂殿本社の前より市社本社の四方小配座 島居 本社と入口瑞垣

神主 福江喜太夫

○増祭神高皇產靈尊延喜式神名帳に武藏國大里郡高樹神社

小座ありて一殿ありて有る然に神社にけりといひて建勝
縁起曰武藏國大里郡熊谷高樹神社に延喜の神名帳小見傳
はるそ崇めたりて幾千年来りていひていふと荒すといはる
事既ふ久遠なりといふ本縁に知る者なく熊谷通言に神あり
御氏の名傳にけりといふ事新しといふ福江喜太夫候御守
と銘ありて建勝の年中に叢祠とていふありて建勝の年中

其母の家に倭訓おのふ例もられざる有の由一柳高皇產靈神
と申に天照大神と相並て、百万神の長としてたゞ世に在るに
ことわりは密にやもさしき者神祇の殿に安んずるに於て
守り國家の鎮守の神に在る靈威の諸國に光被る東路の
諸國にも勸導もあらずとてあらずとても賢く然る今世
水も天の河に餘波のあらず臥臥不測の理地きりたれども中
にも河の神と母高皇產靈神の徳に水の中にも有るものと
いふに信あり神の徳もさるる莫くへた氏傳ふ民神の主
たりといふをいふに推して久敷幽暗に神徳の今威験を足る
ものとの教ひ出さるふ候へりかく隠る大なるに堂々因信を傳へる
ものなり仰るに神の徳もさるる莫くへた氏傳ふ民神の主
たりといふをいふに推して久敷幽暗に神徳の今威験を足る

村民永く恩澤に潤ひ式の祭に在るに神の徳もさるる莫くへた氏傳ふ民神の主
たりといふをいふに推して久敷幽暗に神徳の今威験を足る
ものとの教ひ出さるふ候へりかく隠る大なるに堂々因信を傳へる
ものなり仰るに神の徳もさるる莫くへた氏傳ふ民神の主
たりといふをいふに推して久敷幽暗に神徳の今威験を足る
ものとの教ひ出さるふ候へりかく隠る大なるに堂々因信を傳へる
ものなり仰るに神の徳もさるる莫くへた氏傳ふ民神の主
たりといふをいふに推して久敷幽暗に神徳の今威験を足る

寛文十年庚戌之夏 弘文院學士

当社什書 天國寶刀長三尺七寸五分 刀一振廣國銘有 上指矢一筋根あり住國

天國刀記曰 聞昔文武天皇朝天國為治上始製太刀極精妙無
敵儔者以故世未有得具真者苟能得之則天下莫不稱美余族
太祖曾村山次郎入道清久嘗城武州八王子北居焉家世藏天國
寶刀傳書秘焉清久没子清武嗣清武攝羽生城數十年威名
赫然一旦為冠兵所圍不免而卒軍終敗績清武有二子長
失其名次曰清昌及城之陷也長兄收家譜圖書清昌藏其太刀

而後同長兄住尾州求之不得昌獨家居不仕隱然谷馭昌生
清春春生清次乃余父也娶石井氏生余捨而為僧親戚皆云村
山之祀其可絕乎父曰昔者武功為烈及遭世變無復可云凡有
為事皆如夢幻不如令我子續佛氏以報祖先竟許余出家奉
法既而及石井氏卒遂乃舉家敬施親里躬自剃髮号止庵主
安清已絕世嗣矣故以其天國寶刀奉納于 高樹大明神祠矣君
城景俊守阿部正武廣聞之令使者取刀召刀鑑本阿彌詮視本阿弥
稱真而無贋於是 阿部廣為謂國害矣命工洒削盛于害
匣還納 神祠永為神器去今社司寄害刀舊記乞余筆而
証之因寫其原由更附家譜傳以昭悠久也
寬延三庚午中秋吉日

奉教前往永平後董大衆見隱洛押大山妙玄白龍教手書時年十二

增 白龍和尚傳

白龍ハ村山清次の次子ハ高母ハ石井氏也幼ク

テ僧トナリ永平正山和尚の弟子トナリテ白龍ト号シ龍通教ハ
歸リテ父母省勸以母子幼クテ寺ニ居ルヲおそれニ甘旨誠
結シ又清次龍ト云テ回家出テ僧トナリテ法修メテ親ト所法
の為ニ才力精テ道跡ニ素食シテ天下ニ名知リテ流リテ流レ
テ訓レハ是ナリ心法禪理ハカシメテ急々ニ月明寺ニ歸リ
傳ヘテ普徳ニ通シテ得法ハ後越ノ永平寺ニ傳ヘ又席越洛ハ
の源光ニ董加ハ大衆ニ移住シテ新ハ洛西ニ妙玄寺ヲ創シテ不
增 千秋神社 高樹社の西にあり祭神未考至て古社のより此指
出小田照寺といふなり雄野山千秋院と号し小戸村千秋庄と云

白河

○直実古銘趾

増 臥たり北ニテ斗熊野権現の社有る處也と云

傳ふ者多し戸田ハ村ト東行寺ト云寺有り此實の城地あり
云り今佐谷田村のふ子ハ丁と云處ありと云東行寺と云ハ村
ト東行院なる由一近世の文書ハ久下東行寺東行院ト云る有り
さて此寺ハ直光の白河時より直實直光は是限なるあり

○東鑑

治承六年六月五日甲辰熊谷ニ即直實者匪勵朝夕恪勤
之忠去治承四年追討佐竹冠者之時殊施勲功依令感其武勇
給武藏國舊領等停止直光之押領可領掌之由被仰下而直
實此間在國今日令參上賜件下文云
又下武藏國大里郡熊谷ニ即直實所定補所領之事

右件所且先祖相傳也而久下權頭直光押領事停止以直實
為地頭之職成畢具故何者佐汰毛四郎常陸國奥郡花園山
楢籠目鎌倉令責御時其日御合戰直實勝萬人前懸一陣
懸壞一人當千頭高名具勸賞件熊谷卿之地頭職
成畢子孫永代不可有他妨故下百姓等且兼知敢不可
違矣

治承六年五月丙日

増 熊谷塘

驛の南裏にあり 佐古熊谷堤として長と御堂

是形ハ佐谷田ハテ久下の河よりまじ堤の上成儀事ありと云
長蛇塘と云ハ此の長き所の名なり

芭蕉翁碑

新宿の舟屋より北行ハ町屋のふり建ハ今亦出

壇をうり 日長 鐘、旭寺

○蓮山熊谷寺

駒の西倚、中戸改めて右にあり

浄土宗智恩院末寺、領三十石御朱印

蓮生法師本像

昭段に安置

十王堂、阿弥陀堂

右本堂の右にあり

弥三左衛門福荷

門内の右にあり、本社拝殿、賢人、詩人、和漢の書、歌、草花等の彫物あり、美雅なり

増 近世男女皆云、小児の生弱物、世の福荷、小仕女、おれ、ゆたき

有りて、生年限、短く、見、見、見、の面、髪を、髪、遺り、嘗て、叱、事

あつ、一、大、方、江、海、り、一、成長、せ、る、一、所、と、一、僧、祈、一、奴

福荷、と、一、指、人、晴、雨、等、と、一、

仁宮

門内、入、り、左、の、方、に、奉、お、鎮、有、

中門、惣門

塔中

上品院

蓮生法師廟所

本町の後、あり

縁起曰、熊谷二郎直実、

桓武天皇の後、胤平直方の子也、若冠の時、関

東、と、趣、り、久下直光の、聲、と、呼、れ、成長、し、随、い、武、勇、著、く、一、一、都、侍、質

門の合戦、一、悪源太義平、十、一、騎、武者の、隨、一、と、呼、び、石橋山の、戦

一、一、臥、本、隠、居、の、恩、賞、と、一、一、萬、一、堀、の、致、附、と、一、幕、右、大、將、頼、朝、公、の、

拜、領、を、其、外、勤、功、の、感、状、廿、一、通、と、一、賜、り、其、後、壽、永、三、年、甲、辰、二、月、七、日

根、妙、一、番、の、合、戦、一、無、官、太、大、鼓、盛、盛、討、つ、首、を、給、り、若、子、直、実、と、戦、州、を、

久、夫、一、一、時、の、悲、し、競、一、教、養、の、父、母、の、歎、一、の、い、や、り、今、昔、の、墓、所、を、

情、則、其、々、提、提、吊、ひ、し、身、を、馬、の、家、に、置、き、後、世、の、思、ひ、も、思、ひ、は、是、

後、心、の、思、ひ、を、以、て、後、速、く、三、年、の、冬、久下、権、氏、直、光、と、鎌、倉、に、於、て、武、能

未、久下、直、光、の、境、争、争、論、一、一、海、邊、に、騎、者、を、と、り、び、重、州、を、湯、山、に、馳、入、り、

事、都、と、一、法、然、と、一、の、御、才、子、と、呼、び、二、心、腹、を、一、念、佛、の、行、者、と、や、め、お、せ、り、

其後程隆元久二年所^レ歸^ル所^ニ至^リ一^ノ人^ヲ於^テ此^ノ所^ニ自^ラ面^シ面^シ
接^シ其^ノ曼^陀羅^ノ并^ニ自^ラ作^ル之^ノ影^ヲを賜^フぬ^ニ是^レ其^ノ後^ニ又^ニ武^ノ妙^ノ下^ニ其^ノ時^ニ
不^レ肖^ル西^ノ方^ノの^ノ行^ノ者^トと^シ候^キ所^ニも^モ西^ノ方^ノ後^ニ上^ニ路^ニさ^リ上^リ見^ルも^モ遂^ニ十^ノ年^ノと^シ
口^ヲ許^リ也^{ナリ}と^シ行^キ道^ノ主^ノ法師^ノの^ノ歌^{ナリ}

淨土^ノも^モ別^ノ者^ト也^{ナリ}法^ノ師^ノも^モ人^ノ也^{ナリ}而^モ不^レ向^フひ^テ後^ニを^シ候^キ也^{ナリ}

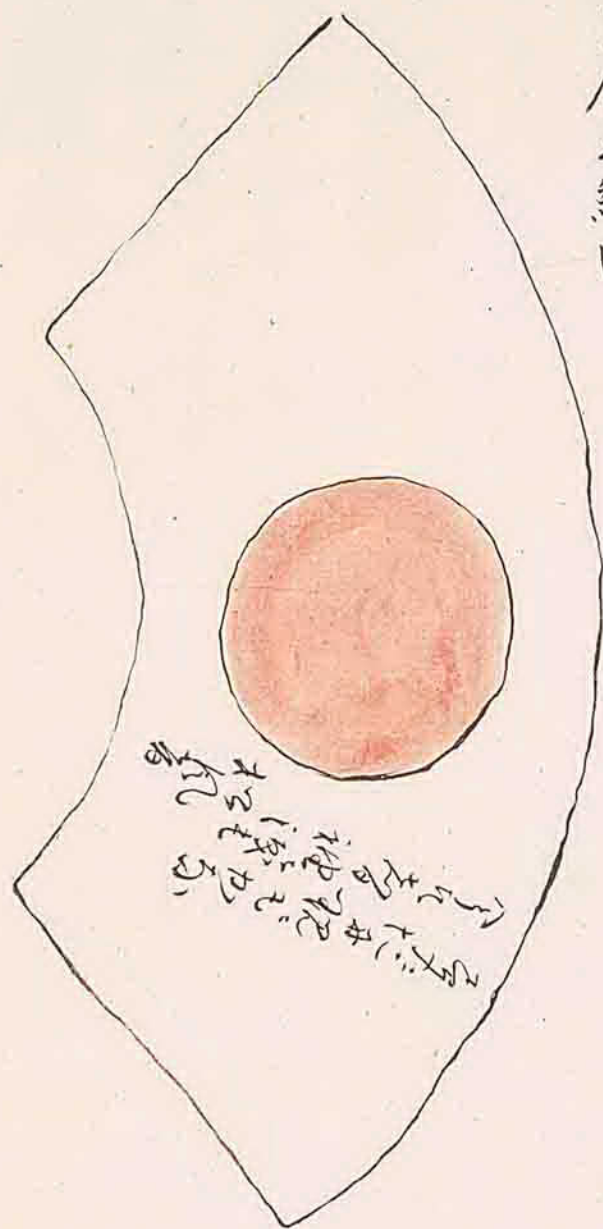
建永二年九月廿午時^ニ生^ル止^ル佛^ノ勅^ヲ許^ス衆^ノ一^ノと^シ村^ノ岡^ノ市^ノ村^ノ岡^ノ
向^シ古^ノ此^ノ所^ニ立^テ坐^シ始^メに^ニ果^シ其^ノ日^ノ乃^ニ人^ノて^シ空^ノ小^ノ音^ノ樂^ノ回^ル（異^ノ香^ノ薰^ル
り^ル）傳^ノ聞^ル者^ノ老^シ若^シ群^レ集^スる^ノ事^ノ幾^ク千^ノと^シ子^ノ孫^ノ之^ノ以^テ蓮^ノ生^ル活^ス湯^ノ
一^ノと^シ聖^ノ衆^ノ衆^ノ者^ノ一^ノ上^ノ人^ノ也^{ナリ}佛^ノ一^ノ彌^ノ陀^ノ未^レ生^ル之^ノ画^ノ像^ノ許^ス千^ノ端^ノ神^ノ香^ノ香^ノ
一^ノ念佛^ノの^ノ夢^ノ諸^ノ月^ノ小^ノ眠^ルと^シり^ルく^ニ往^ス一^ノ畢^ルめ^ニ紫^ノ雲^ノ一^ノ草^ノ菴^ノの^ノ上^ニに^ニ
坐^スる^ノ事^ノ一^ノ時^ノの^ノ間^ノ有^ルて^シ西^ノ方^ノを^シ一^ノと^シ去^ルぬ^ニ是^レ上^ニ品^ノ上^ニ生^ルの^ノ異^ノ功^ノ一^ノ候^キ也^{ナリ}

天正年中陽曆表上^ノ人^ノ中^ノ具^ノ用^ノ基^ノ行^ルて^シ今^ノの^ノ態^ノ活^ノ寺^ノ是^レ形^ノ

弥陀如来縁起曰^ク抑^テ此^ノ等^ノ像^ノ一^ノ態^ノ活^ノ以^テ大^ノ丈^ノ俗^ノ則^ニ年^ノ以^テ子^ノあ^リと^シる^ノ也^{ナリ}
一^ノ七日^ノ再^ニ誠^ニ地^ノ抽^ク折^ル也^{ナリ}也^{ナリ}一^ノ瑞^ノ夢^ノ也^{ナリ}衆^ノ直^ニ正^ニ也^{ナリ}衆^ノ佛^ノ依^テ作^ルて^シ又^ニ
直^ニ實^ニを^シ設^ク直^ニ正^ニ十八^ノ年^ノと^シて^シ畢^ルる^ノ直^ニ實^ニ一^ノ長^ノ壽^ノと^シて^シ又^ニ曰^ク依^テ佛^ノを^シ衆^ノ於^テ
の^ノ日^ノ限^ノ也^{ナリ}告^スむ^ニ一^ノは^ニ是^レ形^ノ一^ノ依^テ一^ノ後^ニ世^ノ等^ノと^シ證^ノ據^ノの^ノ弥^ノ陀^ノ新^ノ也^{ナリ}と^シ
後^ニ諸^ノ隣^ノ里^ノに^ニ是^レ信^ノ者^ノ有^ル此^ノ等^ノ像^ノ也^{ナリ}蓋^シと^シて^シ既^ニ小^ノ宿^ノの^ノ中^ノ程^ノを^シ持^テあ^リせ^ル
一^ノと^シ遂^ニ不^レ宿^ル中^ノ也^{ナリ}有^ル事^ノ叶^フと^シ也^{ナリ}有^ル人^ノ曰^ク中^ノ某^ノ軒^ノ下^ニ小^ノ捨^ノと^シて^シ去^ルぬ^ニ
其^ノ後^ニ彼^ノ監^ノ一^ノ通^ルの^ノ者^ノ来^リて^シ事^ノの^ノ由^ノを^シ懺^メ悔^ス一^ノ未^レ重^ニ小^ノ施^ノと^シる^ノ事^ノ也^{ナリ}
一^ノ候^キと^シる^ノ也^{ナリ}佛^ノ也^{ナリ}

○鎮守弥三左衛門稻荷^ノ神^ノ依^テ弘^ノ法^ノ大^ノ師^ノの^ノ作^ル直^ニ實^ニ不^レ斷^ルを^シ依^テり^テ猛^ニ龍^ノ
討^テ靡^レけ^ル陣^ノ也^{ナリ}有^ル時^ノ態^ノ活^ノ寺^ノに^ニ是^レ名^ノ衆^ノ直^ニ實^ニ小^ノを^シ深^ニ（勝^ノ利^ノ）と^シて^シ

東鑑建久三年壬子十一月廿五日熊谷三郎直實与久下権頭
直光於御前遂一訣是武藏國熊谷久下境相論及也直實
於武勇強人當千之才頗依貽御不屬將軍家辰



母衣之縮圖

南無阿彌陀佛
南無阿彌陀佛
南無阿彌陀佛
南無阿彌陀佛
南無阿彌陀佛
南無阿彌陀佛
南無阿彌陀佛
南無阿彌陀佛
南無阿彌陀佛
南無阿彌陀佛

能谷次郎直實母夜也
為法名法力諸罪滅
此果號盡早



仁三癸亥年
四月八日
源空

寸 一 尺 一

旗之縮圖

三足八寸

利劍即是弥旒

熊谷次郎直實旗也

南無阿彌陀佛

一聲耳稔念罪即除

爲源平面向書久
源光二

一尺二寸

至子孫之能令存者

一先祖相傳所領室堵御新狀之
并保元、平以來至建弘年中
軍忠御狀廿一有之

一對主君不可成逆儀并武直
可守吏

一上人御自筆御理書再

迎接愛賜羅可成信心吏

右卷之件條之外依其身照量
可思見諸者也仍置通狀如件

建弘六年二月九日 蓮生 記

有令尋門給事于時直實申云此事梶原平三景時引
級直光之間兼日申入道理之由欲仍今直實預下問者也
御成如直光定可開眉其上者理運文書無要祿不左右綺
未終卷調度文書等投入御臺中記座猶不堪分怒於西侍自
取力除髮咄詞言殿乃御侍偕登利波則走出南門不及改宅還
電將軍眾殊令驚給或說指西馳駕若趣京都方欺云云
則馳遣雜色等於相摸伊豆所々并宮根走湯山等遮直實
前途可止直世儀之由被仰遣于御家人及衆徒等之中云
又云同十二月廿九日今日走湯山專先妨歎歲末券數以其次申
云直實法師上法事也有偏執羊僧諷調思止畢但左右不
可還參營中整可隱居武州之由申之云々

又云建久五年七月十日熊谷二即直實法師自京都參向辭往
日之武道求來世之佛緣以降偏繫心於西刹終晦跡於東山今度
將軍家御在京之間依有所存不參追凌千程之嶮難泣述丑内
蓄懷仍召御前先申狀離職欣求淨土旨趣次奉談無法用
意干戈故實等身今雖法財心猶並真俗聞者莫不感
歎今日則下向武藏國云々頻雖被令留之給稱後日可
參之由退出云

又云承元二年熊谷二即直實入道以九月十四日未尅可為終焉
期由相觸之間至當日結緣道俗圍繞被東山草菴時尅者
衣袈裟昇禮盤端座合掌唱高聲念佛執終兼睡無
病氣云云

梅もふち記ふとるに多分以て終に中実都が去る爰小曲の
尾屑して没せし撫りし東瀛小考ふふ所を以て終考ふし
いふ人の還ふつゝ古衣馬の肘矢も通るうきり蓮花原
増享保四己亥首夏忍領北河原邑照岩より八景詩歌之由

題熊谷晚鐘

中御門前宰相宣頭卿

勇士猶存一古墳

細懷白旆擁三軍

黄昏過客為追予

驚却鐘聲馬上聞

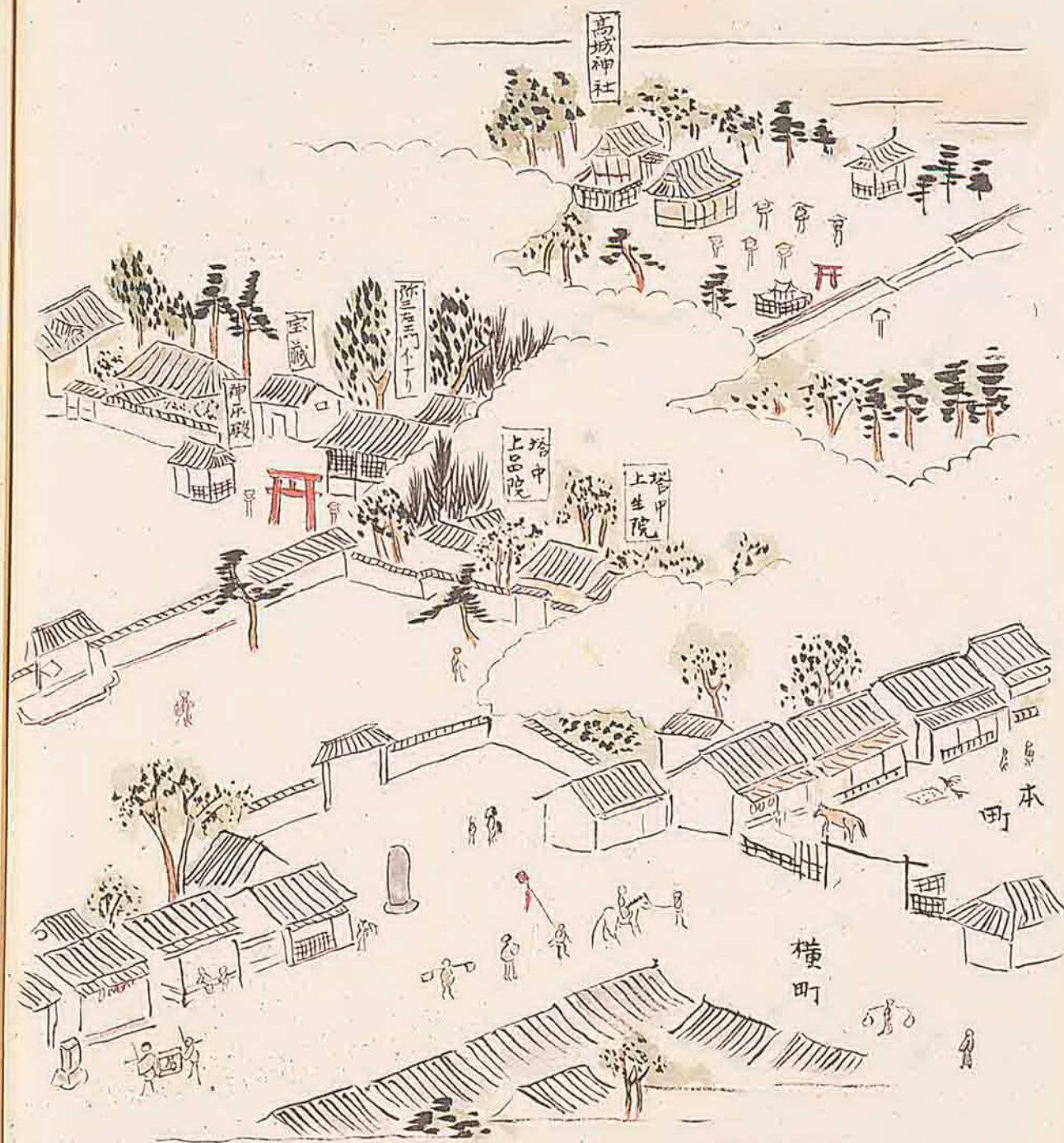
同十八甲寅仲春八條中將藤原隆英朝臣重祢より泉山八景和歌の
却舊題改正云々 右古文書より

熊谷晚鐘

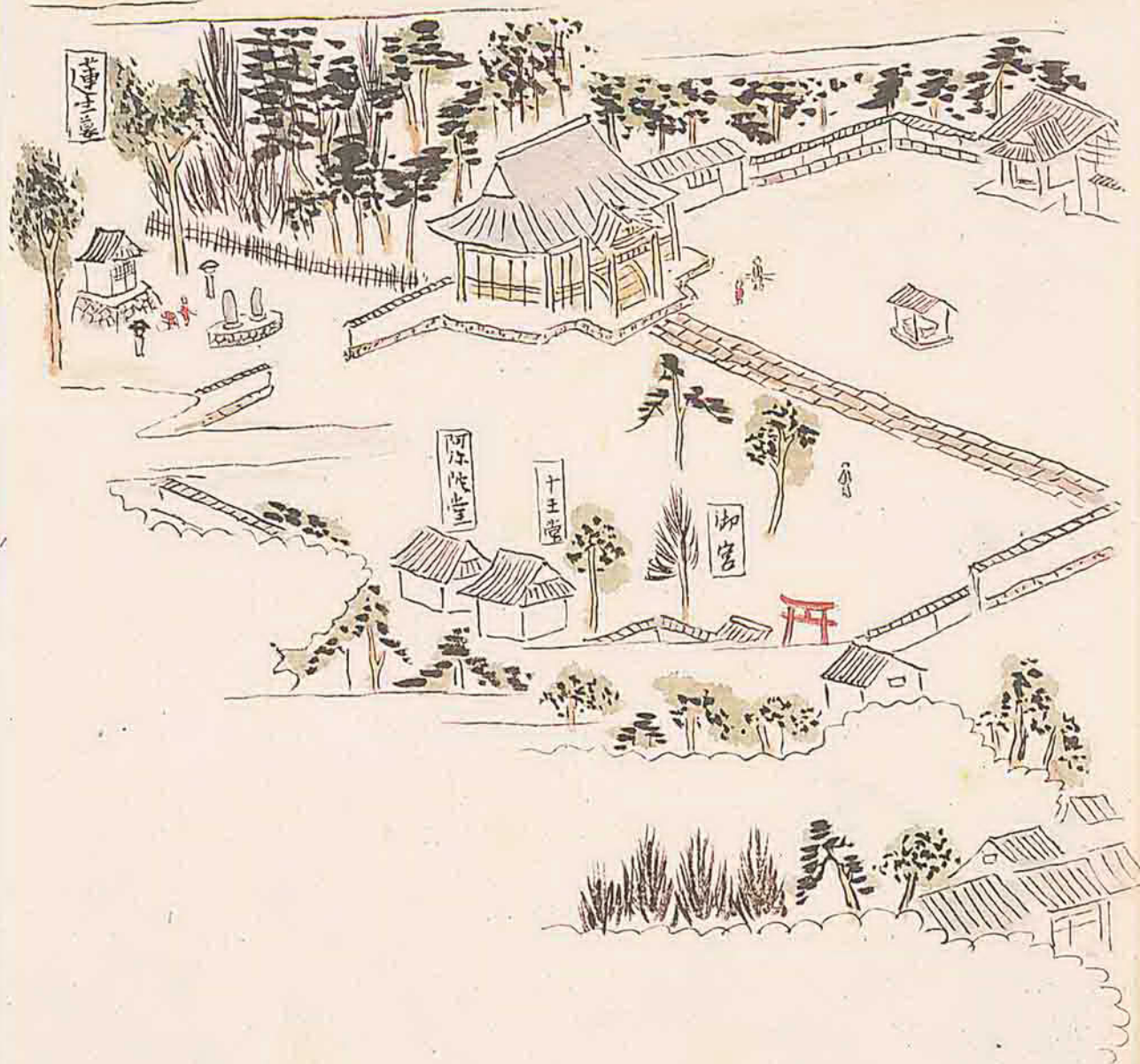
高野前權大納言藤原保光卿

鐘の音にゆきむの夕暮をいれむしむ袖も濡る

蓮生山
熊谷寺
高樹明神



勇士猶存一古墳
緬懷白旆擁三軍
黃昏過客多追吊
驚却鐘聲馬上聞
中門前亭相宣顯卿



蓮生法師武蔵一ノ宮
 小宮西方の行者法師も
 西遊一ノ宮とせしむるに
 蓮生法師と云ふを
 とる人

浄土も別の者や
 河内も

知るなり
 後世の事

蓮生法師



○星河山石上寺

本尊正観世音

長不知聖徳太子作

多門天堂

門の向小宮き 地蔵堂 同供にあり

清泉

庭中より湧く、四方水清く、水魚水軒あり、見ゆる底に、石あり、湧く、水涌出、四時増減あり、水、星河の水と云ふ

傳ふ

蓮生法師の本像、當寺の敷の中あり、寺

遷移せ

て、此より、子供等本像を拝む、此より、也、後今の蓮生

寺(を指し)と云

増

按、蓮生本像の源由詳なり、前より云ふ如く、法恩寺より、も

又、當寺より、も、佛像等、を移りて、他(蓮生寺)も、有、

れど、蓮生より、安の蓮生、の像、此、に、寺の古き、証、より、なり、蓮生、

い、う、ち、や、り、

○熊谷櫻

當寺門内、小敷樹あり、花の、一、時の、美、麗、

増 お傳ふ当寺に往昔石恩の城主和泉守家臣秋山雅樂外、用
基より庵あり、其後世に随ひ荒廢し及び所由歟の竹井某が
多きの再建云々と

増 止心庵 当寺に傳ふ石恩の城主和泉守家臣秋山雅樂外、用
基より庵あり、其後世に随ひ荒廢し及び所由歟の竹井某が
多きの再建云々と

止心庵主安清は、始村山次郎清次と稱して武列無名の人なり、武列は、子
城主村山次郎一を清次の裔なり、又安清春といふ子清昌の時より至る
能者の里止となる家代に、家富も清次石井氏に娶ひて、白紙の庵を
清次宛ふ石井清昌に傳へ、永平山山相尚も参りて、万法帰一の法を
拈提するも、玉叶なり、一日有るものありて、疑團始て氷解し、心も清く
芝の依り、自安清を以て名と、次又覺玄律師より就く梵網法を學ひ
戒律を授けり、安清嘗て撃劍射圃を善に、持戒の後人

是村岡といふ名ある、安清の石井氏流し、下流家財を親戚に
施し、敬し、教恩の古徹律師に授け、剃髪し、僧と稱し、止心庵清と
稱し、盧城邑の星河に夢をうめ、関を閉ち、道を以て偶心を通ふ
る阿れ、自ら名を清次と稱し、一箇に、樂む人、是は星河と云ふ人、と云元禄中
年、夫坐常の如く、盧城無物の偈を唱へ、快然と、一寂に壽五十六
遺命を、随て火化し、て水葬にといふ、
安清の清昌に傳へ、永平山山相尚も参りて、万法帰一の法を
拈提するも、玉叶なり、一日有るものありて、疑團始て氷解し、心も清く
芝の依り、自安清を以て名と、次又覺玄律師より就く梵網法を學ひ
戒律を授けり、安清嘗て撃劍射圃を善に、持戒の後人

○星川 宿の南東に流れて、下二番の沼に入る
○村岡の溪 横河より、南に下り、荒川に合ひ、松山乃、お本田

○増 高山の山脈なり
○増 お傳ふ古の鎌倉街道なり、と、今程、松山、越後、丹波、丹波、相羽の

大山参詣の足跡と伝の事なり此の街にのこる

○目注道

石原町中程に御小巻あり二里余なり

増城和泉守撫上城趾

石原村の西倚より今

侯の御小巻

ある事なり九とふあり水の方城二と九とふあり今城の
家臣の子孫當村に歟なり

城家傳

城伊庵

織部

伊庵

和泉守

武田信濃守晴信に属し鉄炮大將勤む駿州沼津に住む後信

州に移る武田家滅亡の後天正十年

神君に随ひあり石原村に

住し多七村に更に

此家傳に云るも母田に傳と「石原村」
にふし傳と云ふ文の中なり

増和泉守墓碑

字坪井といふ地東漸寺といふあり

今世に建し物といふ

増田川

佐谷田村の邊より涌出する下流上等の清水なり

今に後瀬川

の上より河川元世當り城跡の北なり寛永中今の東竹林の西に築

けり田川古野川といふ所なり今の如く清流なり惣に此村に多く

水沙を吹出せる小池ありなり佐谷石上寺の池に類するなり

増熊久橋

佐谷田と熊谷の地境は還の小川に架る石橋なり

ふといふ(直實と直光と)橋を架りて樹に樹ありとふ

東鑑

建久三年壬子十一月九日熊谷次郎直實與久下權守

直光於御前邊一談是武藏國熊谷久下境相論之文云

増八町之渡口

佐谷田村より千鳥村へ渡り初冬より橋

成係夏に海濱し佐谷田字に八丁の地なりと云り千鳥の海と云

千鳥村に成田の屋千鳥島美作守の旧地なりと云り今に古見領といふ

増補忍名所圖會卷之四終

増補忍名所圖會附録

岩崎 長谷著

増 領の名考の条羽生領、井戸集とある、非なり、本乃伊豆守也

増 御名の考、岡のふと、とふ、香新翁の説、付とふのし、今思ふ

岡のふの、碑、少記を以て考ふる、ふと、と、思ふと、草字の似たるを

誤りともや、何れ、此の御とふ、証も、何と、さきと、福のたう、なき、何れ

増 御本丸 諏訪旧地、持田邑、沼尻と書、誤、沼尻、中里村、北枝、今所

増 鐘掛松 此城、内、諏訪曲輪の堀、より、天正の龍城、本図、

物形、とり、彼鐘、阿部、辰、白川、城、移さる

古鐘銘 松掛、世、植、鐘、物、居、本、所、銘、字、誤、多、く、一、と、讀、一、と、見、考、ふ、一、と、

治鑄梵鐘一枚 施無畏寺

右當寺者畏祖爲關東奉
右次廬家御菩提所令建
立也而此鐘梁上公忽梁
堅雖倍破之就殿即求得
如元令治鑄仍銘曰

今此鐘簾

新古青銅

即爲土子

方命全之

後奄叶度

清音振響

血明警夢

外內九城

憲柙聖裏

文武百碎

各抽臣忠

招提長同

政埋普通

曉夕致勤

久扇梵風

願主正六位上行左衛門尉藤原道敏

敬白

大工

遠江守朝臣

延慶式己酉十一月九日

增標髻堀

地所詳なり天正龜城の時城南要害清田所なり
氏女侍奉例にて堀なる所なり標髻堀といふ指圖なり故

名と云ふなり

增鎌田屋鋪

崎玉村より保元より鎌田兵部正清東鑑小鎌田
次郎長周行後鎌田圖書左衛門尉信俊鎌田三郎入道西阿一より西傳等之
なり成田家より鎌田某なり河内四地なり知れず考ふ由

增若王山

同村より岩窟より太刀等の物出せしなり
なり此より考ふなり成田記云云永禄年中上杉謙信と長泰と和睦の時質

とて末男若王丸上河既橋の城一午嶋義作舟にお添へ遣置く後
鎌倉に於て長巻と又不和なる依て既橋の人質若王丸を盗出せし
城中の兵も追えれ利根川にて暫くしなく主従三人潜越んと川にお
若王丸川中にて甲斐船に溺死す義作舟其信小堀小抱奉りて
忍上洛りし云々若王丸を葬りて塚を人々より村衆に授けし
若王丸既橋より返りての後お近々義作舟を改修棄門より成田を建
立せしなり
増陣場 沼柳におり天守し攻め石田之城陣あり陣地の
松と有る天守の石松と也

増門井村

当村に散在る古文書と云む氏家なり

当村に成田臣栗原大寺外り采地あり今程苗裔

一田五町九反六十歩拾七丁七反五十又門井に田
一畠五町ある也又部なるなり又 同所
右部拾ノ文と不考なり也や仍此作

天正十七年乙丑

十一月廿日 氏長五

栗原大寺の次及

一田五町三反五拾ノ文 門井に田以上
右拾貫ノ所ある也又今ある也や仍此作

天正十七年己丑

十二月廿日 氏長五

栗原大寺の次及

増久下村之系

市田 和名抄大里郡市田 以知

東鑑元久二年六月二十八日以武藏国之下御被寄進勝長壽院

弥勒堂領云云

増池身村子安明神之傳由

神像一寸八分金銅の天女嬰兒小乳状

會いおふ形あり土人傳く神功后皇と云ふ神玉子安の玉質水晶の如く
経う八分一寸五分石七寸四分一寸色濃墨をくろく形平小金粉
と置けるが如き物なり昔時淡野七政思惟家當時社人神像并二宝を
臺に入らず小壇に標し柏を植て去るも社に兵火に焚くこと元禄
中挫きたる柏喬木と成りて夜毎小光を放つ土人を驚れて其處に
はる者昨一人強勝の者ありて彼柏を伐小根をり又光あらず十年して
於城下又も小一の靈証にきき信じて鉄板にたく當くこと靈火にや毀ぬ

中を見らる神像ありと云ふ即社を再建して安良民婦人子育の屋敷
なり小願あり天の中社僧并神像并二宝を携へて去る夜熊谷の
旅亭に宿りる小奇怪ありて神像并二宝を携へて行方不明なる
依て再今の如き鎮座ありとの事なり

増南河魚村

今村重光の系業今村某家より古之君成田氏の姓なり

昔有内室と云はば後承和け方にお
初る皆依るるを配む指ノ文あり系
以長面金つと云ふ似たり也仍女作

天正四年

三月九日



其村源氏なり

増 行田と云号古より有り証

東鑑廿 行田兵衛尉駕小太郎駕四郎太郎云云

増 長野村 長野之即ウ住一旧地と云武蔵記当如秩父重忠の弟

長野之即重清ウ住一里許り地形云

東鑑廿 駕三郎ハ重清也云云 同甲 永野次郎太郎思小太郎云云

増 小見村 小見左衛門家時旧地時と云小見代考

増 白旗明神 白川村より天文年中上松謙信上列より攻来一

時如高子下軍勢松樹一と云今其所と馬橋と云備前如小旗一流

新説一と云土人足利石樵入土中埋免松本松樹並ぬ今に至る迄白旗明

神と崇奉すると云一も松樹をウリ下て神祠系祀時

増 若小玉村 わくたまと云若小玉の所より又若小玉と讀也

行田古例あり當村ハ若小玉小次郎直家ウ居住の地時と云今其旧地ハ建礼

二と云一殿山と云あり程考小玉一武藏國若小玉一黨ハ外圍の故を

付云杯軍の役小見え云

増 三千坊沼 前谷村より古大沼時と云今田圃と云社

古世の沼ハ鐘沈と有一武藏田龍満寺の和尚加藏主此鐘沈法カ沈て

取上寺ハ持新其供一知と鐘一重橋と云一鐘重橋ハ四尺あり上村 あり云

龍満寺ハ存一今ハ常陸筑波山より云

忍名所圖會跋

府縣之志自古皆有之建業以來
智城爲侯國殆二百余年未聞
有志者哉

公移封干城二十年所一旦而此
其人也乃見其書實是文教之所
化可謂盛焉而洞李翁所錄漏從

亦多矣覽者憾焉今岩崎長谷
編搜究索補其遺遂成全書也
亦大焉予借覽之次召感於中國
醉書之後云唐子季秋如公
老漢璋識

松崖書

りあき

るけゆのこゝろいりいれのみあき
とり本すれ石あすれらきいけ
めほりんねをこるけふにかりて
あつうはてしなくけきあきあき
とのいけすてくへりいれふり
きさきいれありけきいれ
けありあき世のけきを思ふく
あきあきいれいれいれいれ
あきあきいれいれいれいれ
あきあきいれいれいれいれ



